

現代社会学部公開講座

京都女子大学 現代社会学部 公開講座報告

「国際交流ノススメ」

2006年6月24日

現代社会学部が主催する公開講座は年に二度、春と秋に開催される。嘉本伊都子・嘉納ももが企画したものとしては三度目となる春の講座が、2006年6月24日に「国際交流のススメ」と題して実施された。

もとからシリーズ化を意図していたわけではないが、2004年に「女性の生きやすい社会とは何か」を題目にアメリカ在住のジャーナリスト林かおり氏に講演をお願いし、翌2005年にカナダ在住のライター関陽子氏と、神戸の編集プロダクション代表中山阿津子氏が「マスメディアと女性のキャリア形成」について現場の経験談を語ってくださったことから、ひとつのテーマが浮かび上がった。必ずしも「メインストリーム」とは言えないかもしれないが、有意義な職業、あるいはライフスタイルを構築することが可能である、というメッセージを若い女性たちに伝えたいと考えた。

1980年代半ばは日本で「国際化」がキーワードとなった時代である。多くの日本人が外国語（特に英語）の習得や海外旅行に励み、仕事においても異文化交流を経験したいと思うようになった。その傾向は21世紀現在も続いているが、実際どのようにすれば「国際的」な仕事に就けるのか、見当のつかない場合が少なくない。本講座では「関西帰国生親の会 かけはし」代表の片岡晶子氏と「関西国際交流団体協議会」事務局長の有田典代氏を講師にお招きし、興味深いお話からヒントをいただいた。

片岡氏はインドネシアでの駐在体験を活かし、関西在住の「帰国生の親」で構成される団体の代表を務めている。赴任者家族の渡航前・渡航後のカウンセリングや、関西の帰国生教育の取材が主な活動である。有田氏が事務局長を務める団体は、関西におけるNPO・NGOの連合体として行政・企業・教育機関とのネットワークを促進し、日本に在住する外国人の人権保障や教育保障を使命としている。両氏とも大学卒業後すぐではなく、幾つかの思わぬ出遭いの末に現在の仕事に就いたという点が共通している。

今や日本から海外に向かわずとも、日本にいながらにして外国人や異文化との交流が日常的にできる（あるいは余儀なくされる）時代である。ボランティア団体、NPO・NGOなどの活動を通じて、日本と諸外国との交流に貢献することは女性にとって今後、ますます重要な職業、あるいはライフスタイルの上での選択肢となるに違いない。

なお、本講座では嘉本伊都子が司会・進行役を、嘉納ももがコメンテーターを務め、講演後は京都女子大学在学学生および一般聴衆を交えた活発な質疑応答が展開された。

公開講座プログラム

- 開催日時 2006年6月24日（土）13：30～16：30
- 場所 京都女子大学J224講義室
- 講演 「気がつけば国際交流」
片岡 昌子 氏 関西帰国生親の会「かけはし」代表
「多文化共生社会へのステップ」
有田 典代 氏 関西国際交流団体協議会 事務局長
- コメンテーター 助教授 嘉納 もも
- 司 会 助教授 嘉本 伊都子